

古典を批評しよう

組

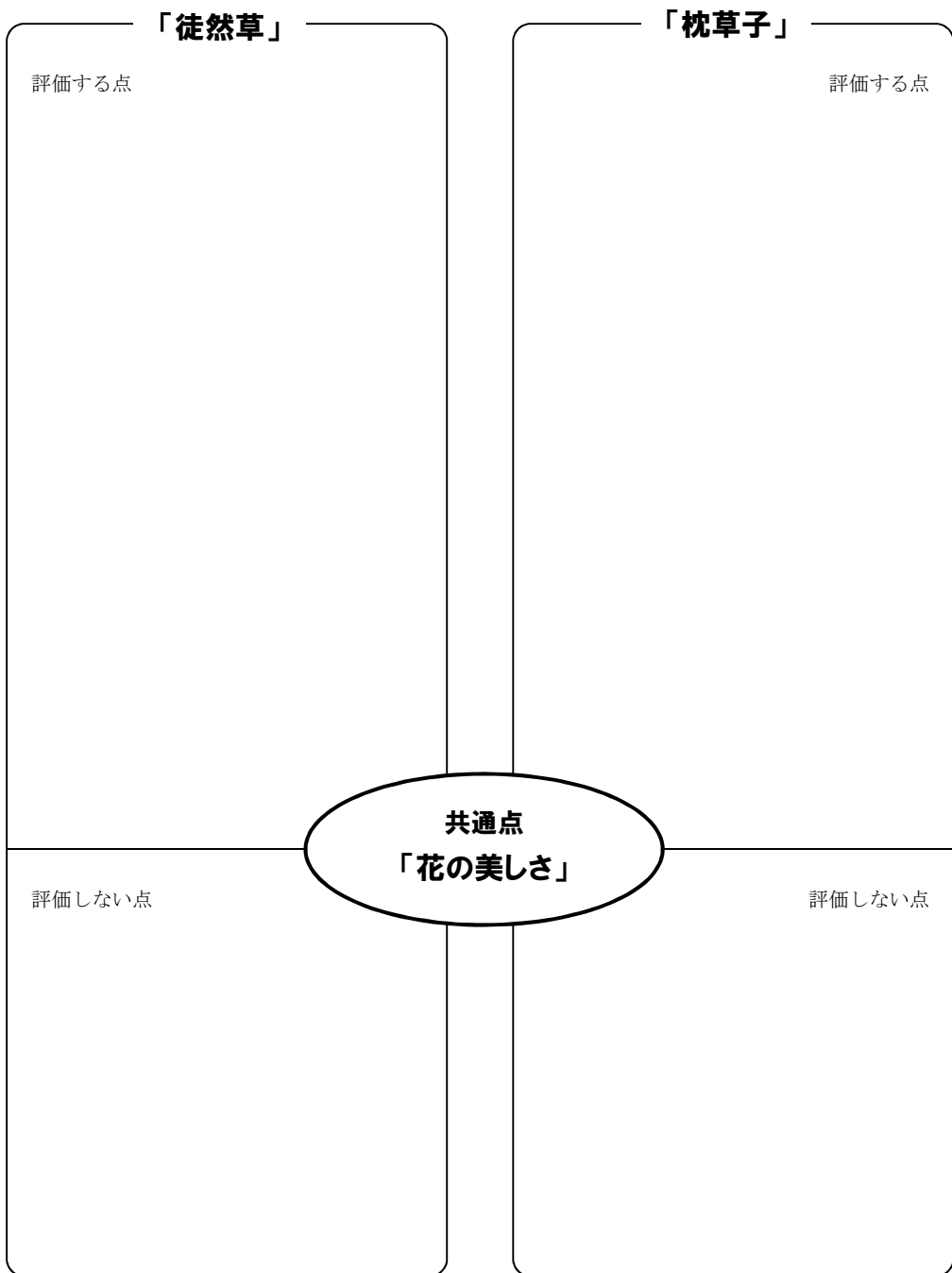
番

考えるレッスン 日本を代表する随筆として、後世に残したいのはどちらですか。

随筆を読む12の観点

| 作品の語られ方 | | 作品の内容 | |
|------------------------------|-------------------------------|---------------------------------|---------------------------------|
| 比喩・象徴 言葉に深みがあるか。 | 語彙(ごい) どんな言葉で語られるか。 | 体験・具体例 筆者の体験に基づいているか。 | 題材 どんな題材を選んでいるか。 |
| 構成 わかりやすく説得力があるか。 | 文のリズム 文のリズムはあるか。 | 深み・意外性 内容がありふれていないか。 | ものの見方 どのように題材を捉えているか。 |
| 読者 どんな読者に向けられているか。 | 色彩・音 五感に訴えかけるか。 | テーマ 筆者が伝えたいことは何か。 | 考え方 どんな考え方をもっているか。 |

課題一 「枕草子」と「徒然草」を読みくらべよう。



「枕草子」 37段

木の花は、濃きも薄きも紅梅。

桜は、花びらおほきに、葉の色濃きが、枝細くて咲きたる。藤の花は、しなひ長く、色濃く咲きたる、いとめでたし。

卯月のつごもり、五月のついたちのころほひ、橘の葉の濃く青きに、花のいと白う咲きたるが、雨うち降りたるつとめてなどは、世になう心あるさまにをかし。花の中より、こがねの玉かと思えて、いみじうあざやかに見えたるなど、朝露にぬれたる朝ぼらけの桜に劣らず。ほととぎすのよすがとさへ思へばにや、なほさらに言ふべうもあらず。

《現代語訳》

木に咲く花の中では、色の濃いものも薄いものも紅梅がよい。

桜は、満開の花びらが、色の濃い葉とともに、細い枝に咲いているのがよい。藤の花は、花房が長く垂れ、色濃く咲いているのがたいそうよい。

四月末か五月初旬ころ、橘の葉が濃く青い中に、花がたいそう白く咲いているのは、雨の降る早朝など、またとなく風情があつて面白い。また、花の中から、実が黄金の玉かと思われるように、たいそう鮮やかに見えているなどは、朝露に濡れた明け方の桜にも劣らない。その上、橘は、古い歌にも詠まれているように、ほととぎすの宿る木だと思えば、なおさら言いようもなくおもむき深い。

「徒然草」 137段

花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは。雨に向かひて月を恋ひ、たれこめて春のゆくへ知らぬも、なほあはれに情けふかし。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ、見どころ多けれ。歌の詞書にも、「花見にまかれりけるに、はやく散り過ぎにければ」とも、「さはることありてまからで」なども書けるは、「花を見て」といへるに劣れることかは。花の散り、月のかたぶくをしたふならひはさることなれど、ことにかたくななる人ぞ、「この枝かの枝、散りにけり。今は見どころなし。」などはいふめる。

《現代語訳》

桜はまつさかりな時だけを、月は雲のかからぬ時だけを見るものだろうか。降る雨に向かつて、雲に隠れた月をなつかしく思ったり、家の中に閉じこもつて、春の様子も分からず桜を想うのも、やはりしみじみとしておもむき深いものだ。まさに咲き始めそうな桜の梢や、花びらが散ってしまった庭などの方が、見どころの多いものである。和歌に添えられた前書にしても、「花見に行つたのですが、すでに散ってしまった」「や「さしつかえがあつて、花見に行けませんでした」などと書いてあるのは、「花を見て詠みました」とくらべて劣っているだろうか。花が散り、月が傾くのを惜しむのは無理のないことではあるが、風流のわからない人は「この枝もあの枝も散ってしまった。もう見どころがない」などと言つてしまふものである。